魚津の蜃氣楼と歴史散策

爽やかな汐風に吹かれながら
豊かな自然が生み出した不思議と
いにしえの歴史に出逢う。

交通のご案内

お車で
- 東京（高井戸IC）— 中央・長野自動車道（約258.4km）— 更埴JCT — 上信越自動車道（約85.8km）— 上越JCT — 北陸自動車道（約87.9km）
- 東京（練馬IC）— 関越自動車道（約244.5km）— 長岡JCT — 北陸自動車道（約157.5km）
- 大阪（豊中IC）— 名神高速（約119.8km）— 米原JCT — 北陸自動車道（約263.1km）
- 名古屋（一宮IC）— 東海北陸自動車道（約189.4km）— 小矢部砺波JCT — 北陸自動車道（約60.5km）

→ 魚津IC（約3km）→ 海の駅「蜃気楼」

電車で
- 東京駅 — 上越新幹線（約1時間10分）— 越後湯沢 — ほくほく線、北陸本線(特急)（約1時間40分）
- 大阪駅 — 湖西線、北陸本線(特急)（約3時間10分）— 富山 — 北陸本線(普通)（約25分）
- 名古屋駅 — 東海道本線、北陸本線(特急)（約3時間30分）— 富山 — 北陸本線(普通)（約25分）

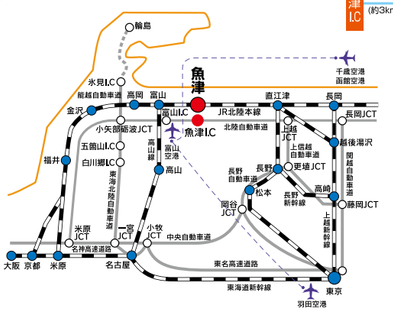
→ JR魚津駅（徒歩（約15分））→ 海の駅「蜃気楼」

飛行機で
- 東京（羽田）— （約60分）
- 札幌（千歳）— （約80分）

→ 富山空港 — 北陸自動車道（約30分）→ 魚津IC（約3km）→ 海の駅「蜃気楼」

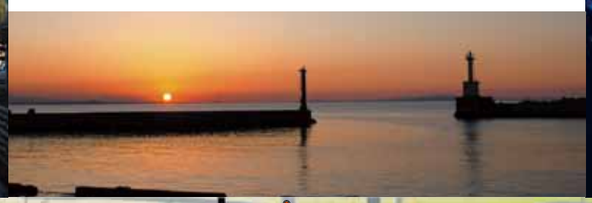
高速バスで
- 東京（池袋駅東口）— （約6時間）

→ 魚津IC（約3km）→ 海の駅「蜃気楼」



パノラマ キトキト 富山湾 赤らめ

お問い合わせ
富山県魚津市観光協会　TEL（0765）22-2244
富山県魚津市商工観光課　TEL（0765）23-1025



不思議の街
魚津の三大奇観

蜃気楼
4月から6月、暖かく晴れ北から微風が吹くような日に対岸の実景が「伸び」「縮み」「反転」する現象が見られることがあります。時間と共に変化する様は、まさに天下の一大奇観です。

埋没林
魚津埋没林は、約2000年前に海面上昇などが原因で埋没したスギ原生林の跡と考えられています。昭和30年に国の特別天然記念物に指定されました。

ホタルイカ
ホタルイカは全長10cmほどの小型の発光イカで、3月下旬から約3ヵ月間、沖合い約1kmで青白い光を放つ幻想的なシーンを見ることができます。

魚津の蜃氣楼と歴史散策

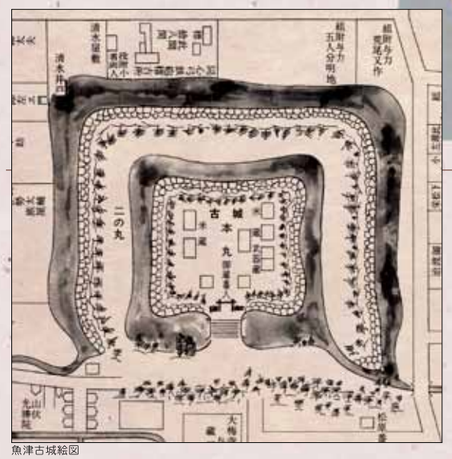
旧十二銀行の米倉（現：魚津水産）

大正年間の魚津港

魚津補助港

諏訪神社

モニュメント「風の地平線−蜃気楼」

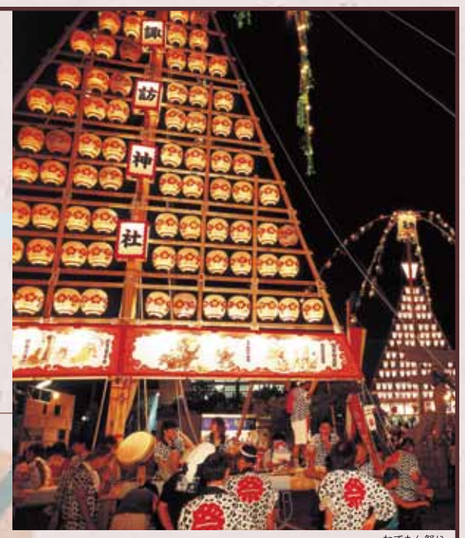

魚津古城絵図

❶たてもん祭り

毎年八月の第一金曜日・土曜日の両晩に、漁夫の宮である諏訪社の祭礼において「たてもん祭り」が勇壮・華麗に行われます。

「たてもん」は、豊漁と航海安全を祈願して贄（にえ）（供え物）を神前に奉納することからきたといわれ、そり形の台（二・六m×一・二m）の中央に心棒（高さ約十六m）を立て、約八〇～九〇個の提灯を帆の形に飾り付けたもので、八〇人ほどの人々によって威勢よく曳き廻されます。

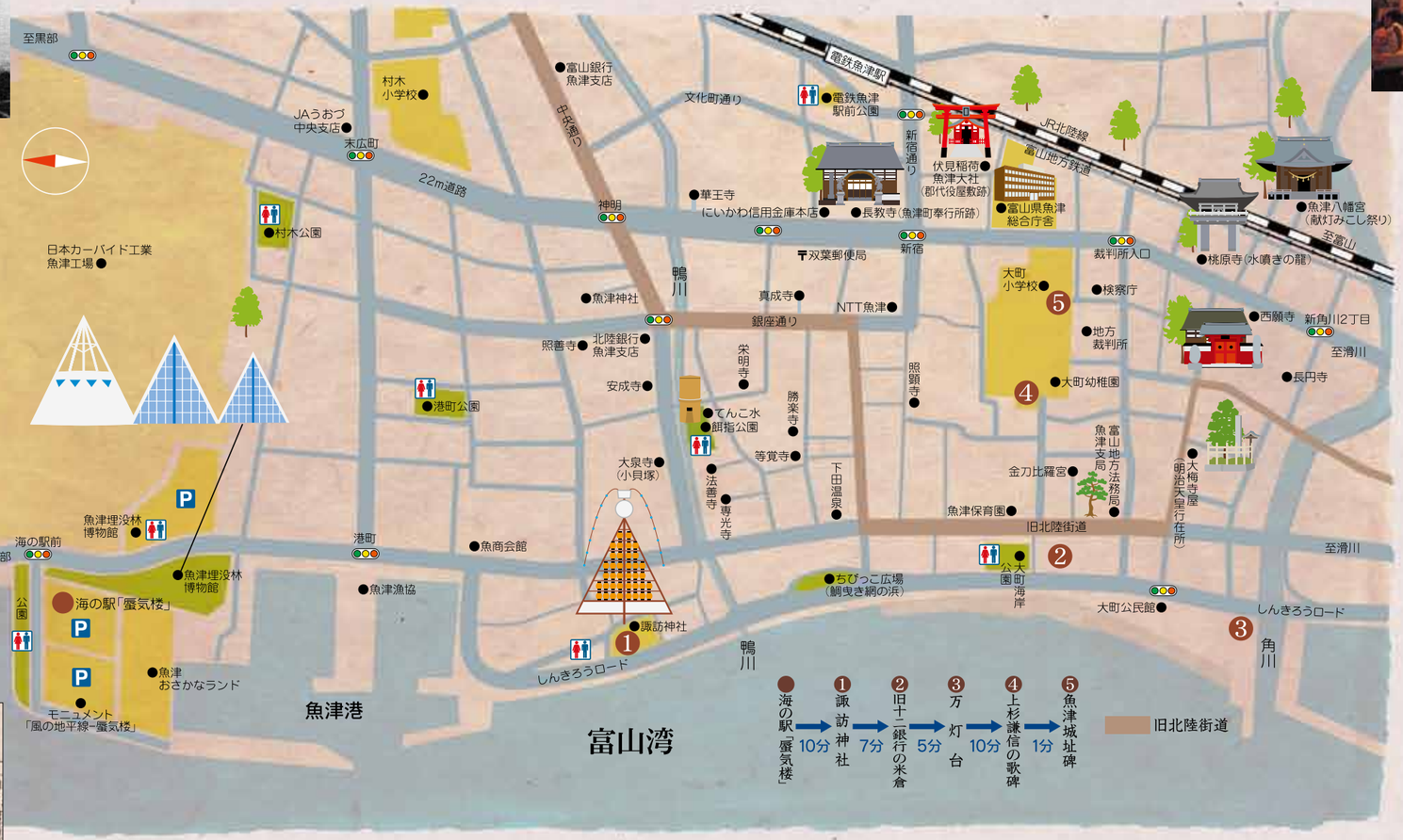
たてもん祭りの形式が現在のように固定されたのは江戸時代の半ば頃で、九基の「たてもん」があったといわれていますが、現在残っているのは七基で、各町内、保存会で管理、保存がなされています。昭和四七年に「たてもん」が県の有形民俗文化財に指定され、さらに平成九年には「タテモン行事」が国の重要無形民俗文化財に指定されています。


たてもん祭り

❷魚津の米騒動

大正七年、魚津の名を全国に知らしめたのが「米騒動」です。大正七年（一九一八年）七月一三日、北海道への米の輸送船伊吹丸が魚津町に寄港。おりからの米価高騰に苦しんでいた漁師の主婦ら数十人が、米の積み出しをおこなっていた大町海岸の十二銀行の米倉庫前に集まり、米の積み出しをやめるよう要求し、このため米の搬出は中止されました。その夜、百数十人に膨れた主婦たちは町内の米穀商宅に押しかけ、移出阻止を求めました。これが、時の内閣を総辞職に追い込んだ米騒動の始まりです。

旧十二銀行（現：魚津水産）



❸万灯台（まんどうだい）

江戸時代の運輸は、陸上より海上による場合が多く、魚津港にも北海道や敦賀・大阪まで往来する数多くの船舶が出入りしており越中米・新川木綿・筵（むしろ）などを積出しとても栄えていました。

この灯台は、慶応四年（一八六八年）に第四三代魚津町奉行小川渡が角川尻に建設したもので、当時は、この地が魚津港でこれが魚津港最初の灯台として暗夜の航路を守ると共に台中に地蔵菩薩を安置して海上安全を祈願していました。

この灯台を維持するため、油屋十二軒へ三六〇貫を貸し渡した利息を油代にあてたことから、この灯台の明りは消えることがなかったといわれています。

万灯台

❹上杉謙信の歌碑

「武士（もののふ）の鎧（よろい）の袖（そで）をかたしきて
枕（まくら）に近（ちか）き初雁（はつかり）の声（こえ）」

魚津市史によれば、天正元年（一五七三年）四月に甲斐の武田信玄が病没し、越後の上杉謙信が越中及び加賀の半ばを制圧したと記しています。この歌は、ちょうどこの頃、越中に攻めいった上杉謙信が魚津城外にて詠んだものとされています。

初秋、魚津城の地にて鎧を着けたままの上杉謙信が万感の想いを込めて口ずさんだものです。現在、魚津市立大町小学校に常盤の松とともに歌碑が置かれています。

上杉謙信の歌碑

❺魚津城址碑（現：大町小学校敷地内）

魚津城の築城年代は明らかではありませんが、その歴史を語るときに欠かせないのは、戦国時代、織田信長が天下統一を目指し、上杉軍との戦いを繰り広げ、後に「上杉家の悲劇」とも呼ばれた「魚津城の戦い」です。天正十年（一五八二年）六月三日、柴田勝家、前田利家、佐々成政等が率いる織田軍四万五千に攻められた魚津城は、城将みな壮絶な討死・切腹を遂げました。

天神山城には上杉景勝、直江兼続が率いる援軍が駆けつけましたが、越後の新発田重家が反旗を翻し、また、織田の別働隊が春日山城に迫ったため、やむなく上杉軍は春日山城に引き上げました。

この前日、六月二日本能寺にて織田信長が明智光秀の謀反により自刃（本能寺の変）。この知らせを受けた織田軍は、全軍引き上げました。本能寺の変がもっと早く起きていれば、歴史はどう動いていたでしょうか…。

魚津城跡

出土した石垣